

2009年9月14日（月）9：00-9：30

主催者挨拶 「なぜ AIF を開催するのか？」

出井 伸之 クオンタムリープ株式会社 代表取締役

2009年ほど大きな変化のあった年はないと思います。特に日本では政権が自民党から民主党へ変わりました。このことは「日本は変化しなければいけない」という皆さんの思いの表れであると感じます。中国・インドなどアジアの国々も変化しており、2009年という年は、本当の意味で21世紀の社会に移行する年になるのではないかと考えます。

弊社では、過去2年、アジア・イノベーション・イニシアティブという名称のフォーラムを福岡で実施してきました。福岡は韓国にも中国にも近い土地ですが、私自身はアジアと日本と一緒にイノベーションを起こすことに、しっくりこない感覚を、つまりアジアは成長期で日本がピークアウトしたというだけではないという違和感を抱いていました。この違和感の解消には日本側の変化が重要なのではないかという意味と、政策提言という意味も含めて、今年は開催地を東京に移し、名称もアジアイノベーションフォーラム（AIF）と改め、日本経済新聞と一橋大学大学院国際企業戦略科との共催とさせていただきます。

私は今、日本自身が自らのありかたを再定義する時期にあると考えます。現在、日本はお金の流れがストップし、企業も社債は出せないし、銀行はお金を貸してくれないという状況です。民主党にはまずお金の流れをしっかりと作るということを最優先に取り組んでもらいたいと思います。加えて、新政権には日本のビジョンを出していただきたい。ただし、きっかけは民間からも起こさないといけないと思うのです。今回の AIF 開催にあたり、Group20 と称して、40-50 代の各界の若手・中堅リーダー約 20 人のメンバーの方々に月一回お集まり頂き、日本が直面する様々な課題について議論してきました。その結果として、本年のフォーラムのテーマが決まりました。地球の限界は見えています。日本は人口が減っておりますが、インド・中国では人口爆発が起こります。アジア各国が急成長する中で、日本がどうすればいいか、私たちには考える責任があると思うのです。先ほど、アジアと協調していく上での「違和感」について少し触れました。日本は 70~80 年代の急成長とその後のリセッションを経験しました。日本の技術について、アジアとどうやったら協業ができ、補完的になるか、このフォーラムを通して考

えていきたいと思います。まず、一日目（9月14日）は大きく世界を捉えて、現状の課題を抽出したいと思います。世界の金融は今どうなっているか。これからどうなるか。アジア・日本の課題は何か。二日目（9月15日）は各論に入り、インフラの転換がもたらす産業の創出を考えます。ドバイの高層ビルや中国天津のエコシティに代表される21世紀的都市など具体例に踏み込んで課題を抽出したいと思います。私は今月末、『日本大転換』という本を出版（幻冬舎）いたしますが、同じようなテーマで何冊かの本が出ています。一つは、井熊均氏『インフラ大転換』、もう一つは竹村真一氏と山崎養生氏の共著による『環東京湾構想』です。この3冊は「日本をインフラから作り直そう」という考えに基づいた提言を本としてまとめています。

国家のビジョン作りは大変な作業です。民主党が大丈夫なのかと多くの人が考えているかもしれませんが、選んだのは我々であり、それゆえ、我々は建設的な助言をしなくては行けないと考えます。わたしは、変革の時期にはクリアなビジョンが必要であると思うのです。日本のような成熟期を迎えた国にこそ、シャープな戦略が必要です。我々の世代は日本の成長期を知っている世代ですが、今の30代以下が社会に出たときはすでに不況で、彼らは日本のいい時を全く知りません。今の若い世代をおとなしい、ノイローゼ気味と感じていらっしゃる人も多いかもしれません。私はソニー時代に河合隼雄さんにご講演いただいたときの言葉で「成功した人間はいっぺん鬱（うつ）になる。これをクリエイティブディプレッションという。」とおっしゃっていたのを思い出します。ソニーはクリエイティブな人が多いので彼らがみな鬱になっては大変と思いましたが（笑）

また、現在は世代交代が必要な時であるとも考えます。今後は新しい世代ががんばっていかなければいけないと思うのです。過去の成功（とくに80年代の成功）を私たちは忘れなければいけません。官僚ももっと方向性をフォーカスすることが必要であると私は思います。そういう観点から、今から具体的なことをやらなければいけない、とくにそのような現場を作らなければいけないと考えます。私はこのフォーラムがそのきっかけになればいいと考えます。本フォーラムではフロアの皆様もぜひ積極的に参加していただきたいと思います。
